

琉球方言と九州諸方言との比較(V)

野 原 三 義

びな 河貝子。ビナ 『博多方』
 ミナ 巻貝, 蜷 『五島方』
 ミナ ニナに同じ 蜷 長崎版 日 葡(「方言」3—5)
 ビナ 小形の巻貝。タビナ (田蜷) 『熊南方』
 コヒナ 蜷貝 『肥後方』
 タミナ たにし 天草牛深(「方言」3—8)
 みな 蜷 『宮崎方』
 タビナ マルタニシ 鹿児島(「方言」3—11)
 ミナ (隅) 蜷 『鹿辞』
 ビナ (薩) “ ”
 タミナ たにし 種子島(「方言」3—7)
 “ ” “ (“ 3—3)
 ミナ 蜷 屋久島(「方言」4—4)
 タミナ たにし 宝島(「方言」2—1)
 ta:nna <たにし>。国頭村辺野喜方言で巻貝を mina という
 ミミクソ 耳垢 『肥後方』
 mimikusu <耳垢>
 みんなのは ミ、タブ (耳朵) 『佐賀方』
 みみのは 耳。耳朵 『宮崎方』
 ミミノファ 耳朵 ゴンザ『漂流民』
 miminuɸa:<みみたぶ>
 みんなだれ 耳から出る膿 『都城方』
 耳だれの状態にある者を mind₃aku とい
 い, それを罵倒して mind₃aka: という。
 首里な「minzai 耳だれ」(『沖辞』)とい
 う。
 ミンノコ 盆に仏前に供へるもの 長崎
 県南松浦五島(「方言」5—12)
 minnuku: <ɕitfigawatʃi (盆) に仏壇に供
 えるもの。水の子。砂糖きびの su:ra (先

端部分) などで作る>
 みらじィ 見ないで 『宮崎方』
 打消の「ず」系統と思われるものは与論方
 言で盛んである。例えば茶花方言で ʔa-
 garadʒi <あがらない>, wakaradʒi <分
 からない>, ʔikaradʒi <行けない> など
 と言う。沖縄方言はオモロ語にはあるが日
 常語にはほとんどみられない。
 みんなちゃば 耳朵, みみたぶ 『都城方』
 ミンナバ 耳朵 『鹿辞』
 mintʃamba ho:kari:mi <びんた食わされ
 るか> という場合の mintʃamba に同じ
 か。
 むうつ ムツ (六) 『佐賀方』
 mu:tʃi <六つ>
 ムカシカタイ 昔 噺を 談ずる事 『犬隅
 方』
 ŋkaʃi munugatai <昔話>
 むかぜ ムカデ 『佐賀方』
 ムカゼ 百足虫 『大分方』
 むかぜ むかで, 百足 『都城方』
 ムカゼ 百足 『鹿辞』
 ŋkadʒi <むかぜ>
 ムカル 抵抗する又攻勢を取ることにいふ
 球磨山村語彙(「方言」5—8)
 むかる 敵対する。向かう。抵抗する。「よ
 しムカルならムカッテ来い」 『宮崎方』
 むかう 反抗する。手向う 『都城方』
 ŋkaɪŋ <向かう。敵対する>, ŋka:to:ŋ <喧
 嘩しようとしてまさに向かいあっている状
 態>
 ムコヅラ 額 『五島方』
 ムコーヅラ 額 『大分方』
 むっがお 向顔, 正面向合いの顔付 『都

城方』

ムケヅラ 額 『鹿辞』

むけづら 頬。ほった。 (例) ぎを ゆた
や むけづらを ぴしゃっち やられもした
(屁理屈を言ったら頬をぴしゃりとやられま
した) 『かごしま語あんない』

gke:dʒira ʔakumuku sattaŋ という場合、
外から入って来ていきなり怒られるのだから
gke:dʒira の gke: は迎えの意と思われる
が、上記九州方言との関連も考えてみる
べきか

むぞがる かわゆがる 『筑紫方言』

むぞがふる 愛スル詞ナリ 『菊池 俗 言
考』

みぞうがる カハユガル 『佐賀方』

むぞうがる “ “

ミジョカ, ミゾカ, ミショラシカ 愛らし
い。美しい 『五島方』

ミショガル 可愛がる 『五島方』

ムザウ 人に対して慈悲・同情の心あること
を示すに用ゐる語 長崎版 日 葡(「方言」
3—5)

ミゾガイ 愛する 天草牛深(「方言」3—
8)

ミゾカ 可愛い 天草牛深(「方言」3—8)
ミゾラシカ 愛らしい 天草牛深(「方言」
3—8)

かはいらしいと云詞のかはりに……肥前及薩摩
にて。むざうと云 『物類称呼』

ムゾウ(無慙) 可愛 水俣のモショウ,
球磨川沿岸のミショウ何れもムゾウに同じ
『熊南方』

ミジョカ(芦)。ミゾカ(球, 芦, 天)。ミゾー
カ(天)。ムゲネー(阿)。ムジョカ(芦)。
ムズラシカ(八)。ムゼ(上)。ムゾカ(菊,
玉, 宇, 上, 下, 八, 球, 芦, 天)。ムゾー
カ(球)。ムゾギー(阿)。ムゾラシカ(全
く筆者注, 熊本県全部)。モジョカ(芦)。モゾ
カ(球)。モゾギー(阿)。モゾラシ(阿)。モ
ゾラシカ(市, 上, 球)。ムゾガル(全)

以上『熊方資』の〈かわいい〉〈かわいがる〉
の項より適宜参照

ムゲネー カワイソーナ 『大分方』

ムゲナイ 不憫カワイソーナ “

ムゲナシ 人死シテムゲナシ “

ムゲネー 「ムゲナイ」ニ同シ “

ムゾガル 人ヲムゾガル “

ムゾーギー 可愛 “

ムゾーガル 愛スル “

ムゾーラシー アノ子アムゾーラシー(愛ラ
シキ意) 『大分方』

ムゾウラシ 愛ラシ, 此子ハムゾーラシ
『大分方』

ムゾナギー 人死シテムゾナギー 『大分
方』

ムドーガル 愛スル意 『大分方』

ムドーナゲー 可憐ノ意 “

ムドーラシー カワユラシー 『大分方』

ムドウラシ カハユラシ “

むじ・むじい かわいい。愛らしい
『宮崎方』

むぜ かわいそうに 『宮崎方』

むぜもむぜ 非常に可愛い 『宮崎方』

むぞおがる かわいがる “

むぞおぎ かわいそうだ “

むぞおげえ “ “

むぞおな ①かわいらしい。②かわいそう
な 『宮崎方』

むぞか ①愛らしい。かわいらしい。②ふ
びんだ。かわいそうだ 『宮崎方』

むぞがる かわいがる “

むぞぎい ①可愛らしい。「まあ、ムゾキイ
子ちゃ」。②可哀想な。「親を失うて、ムゾ
ギイこつちゃ」 『宮崎方』

むぞなぎィ ①かわいそうな。かわいそう
だ。②かわいらしい 『宮崎方』

むぞなげェ かわいそうな 『宮崎方』

むぞむぞ かわいいかわいい。おとなが幼児
の頭をなでたりなどしながら言うことば
『宮崎方』

むぞらしい かわいらしい 『宮崎方』
 もぞおぎ かわいそうだ “
 もぞがる かわいがる “
 もぞぎい かわいそうだ “
 もぞなぎィ “ “
 もぞなげェ “ “
 もぞらしィ かわいい “
 むじ、むぞらし かわいらしい 『都城方』
 むぞがる 子供を愛する、可愛がる 『都城方』
 ムゼ かはいらしい 大隅方言（帖佐）
 （「方言」4—5）
 モゼ かはいらしい 大隅方言（帖佐）
 （「方言」4—5）
 ムズィ 可愛らしい、愛くるしい 『大隅方』
 ムゾカ 可愛らしい、愛くるしい 『大隅方』
 ムゼ 可愛イ 『鹿辞』
 ムゾカ 可愛イ 『鹿辞』
 ムゾガッ 可愛ガル 『鹿辞』
 ムゾナッカ 可愛想ニ “
 ムゾカ 愛らしい 種子島（「方言」3—3）
 ムゾカ、ムジョーカ 可愛い 種子島（「方言」3—7）
 ムズッカ 可愛い 屋久島（「方言」4—4）
 ムゼ かはいム 硫黄島（「方言」4—9）
 ムジョガッ 可愛がる 硫黄島（「方言」4—9）
 ムジョガル 可愛がる 硫黄島（「方言」4—9）
 ムジョイ 可愛い 宝島（「方言」2—1）
 ndzo:saŋ <かわいい。いとしい>。 ndzo:sa suŋ <かわいがる>。伊波普猷によれば ndzo:gaŋtʃi:na: に <かわいそうに> の意がある（『琉球戯曲辞典』『南島八重垣』の伊波注等参照）。組踊『女物狂』の「ゑい〜、わらべども。言ふことよ聞けば、無蔵なものよ。無理になばくるな、急ぎ戻

れ」（『伊波普猷全集』3巻P258）の「無蔵」も<かわいそうな>の意であるが、日常語ではあまり聞かない。伊良部町伊良部方言の ndzo:na munu というのは今も <かわいそう> の意で用いられている。

この語は早くに、伊波は九州の方言と宮良当社は東北や九州など全国的な観点でみていた。よく引きあいに出る「玉の美簾や白雲に見なち 内にいまへる無蔵や月にみなち」など琉歌語「無蔵」であるが、この男から女を呼ぶときの称「無蔵」[ndzo]を九州語の移入と考える考え方がある。しかし、私は形容詞 ndzo:saŋ の語幹部分 ndzo: が独立して発展していった形とみている。 magisaŋ <大きい> tʃurasaŋ <美しい>。ʔuturusuŋ <恐ろしい> などの形容詞語幹部分から magi: <大きいもの>。 tʃura: <美しい者> ʔuturu: <恐ろしい者> などが派生するのと同じように考えたい。

ムツ 毛頭 『鹿辞』
 ムツ 少しも、毛頭 『大隅方』
 muttu <全然、全く>、 muttu ku:ŋ <全然来ない>
 ムッケー 少しも、まるで。ムッケー ツレンザッタ <全く釣れなかった> 種子島（「方言」3—3）
 musattu <全然、全く> に関係あるか
 me: 眼 宮之浦（『薩南諸島』）
 “ “ 尾之間 “
 mi: <目>
 メクソ 眼やに 『肥後方』
 mi:kusu <目やに>
 メシギャー 御飯のしゃもじ 熊本県山村語彙（「方言」6—4）
 メシギャ 飯匙 天草牛深（「方言」3—8）
 メシギャ シャモジ 『肥後の方言』
 メシゲ シャモジ 『肥後の方言』
 めしがえ しゃもじ、飯杓子 『宮崎方』
 めひげ “ “

めしげ 飯杓子 『宮崎方』
 めしげ しゃもじ、飯貝 『都城方』
 メシゲ シャモジ 『鹿辞』
 “ しゃもじ 『大隅方』
 “ 飯杓子 大隅方言(「方言」4—5)
 “ “ 硫黄島(「方言」4—9)
 “ “ 屋久島(「方言」4—4)
 mifige: <しゃもじ>
 めっくう 片目 『佐賀方』
 メックワ めくら 屋久島(「方言」4—4)
 mekkwa 盲 宮之浦(『薩南諸島』)
 mekkwa: “ 尾之間 “
 mi:ku: <めくら>。mikkwa: <めくら、
 さげすむ気持ちがある場合がある>
 めのしん 瞳 「大和口上言葉集」(『九州
 方言』)
 mi:nuʃiŋ <ひとみ>
 メヒニチ 毎日毎日 『大隅方』
 me:natʃi <毎日>。首里方言は meenici
 (『沖辞』)
 めやう めくばせ 「はまおぎ」(『九州方
 言』)
 めよー 目くばせ 『博多方』
 mi:jo: <目くばせ>、mi:jo: suŋ <目くば
 せする>
 メヲオトス 落命する。死する 『大隅方』
 mi:ʔuti:suŋ <死ぬ>
 メンソ 参りましょう。来ましょう。鄭重な
 言葉 マタメンソ <又参りましょう> 『大
 隅方』
 menso:re: <いらっしゃい> に形が似てい
 るが関係あるか。ただし、これは「召しお
 われ」に起因するといわれる。
 mentama 眼 奈留町方言(『五島列島』)
 “ “ 上五島方言 “
 mintama <眼球、目>
 モエ 共有 大隅方言(「方言」4—5)
 “ 頼母子 “ “
 “ 無尽、頼もし、もやい 『大隅方』
 mue: <頼もし、無尽>

もーつ 六つ 『博多方』
 mu:tʃi <六つ>
 もす ムス(蒸) 『佐賀方』
 ʔmbusuŋ <蒸す>(→「オモス」)
 モガイ 悶える 天草牛深(「方言」3—8)
 もがう さからう 『宮崎方』
 もがる 反対する “
 キガモゲル 気の苛立つこと 『対馬方』
 muge:iŋ <沸騰する>、ju:nu muge:to:
 sa <湯が沸騰しているよ>、ʔarigaʃimo:
 muge:iru suʃiga <彼の考えはたぎるよう
 に悪い>
 もつれ合 所^レ睦合ナリ 『菊池俗言考』
 mutʃiri:ŋ <男女が恋仲になって離れら
 れなくなること>
 もてえ モトユヒ(元結) 『佐賀方』
 nanairu mu:ti: という人身御供の伝承が
 あるが、これは七色のもとゆいのことであ
 る。『沖辞』に「muutii 元結い」とある。
 もとや 実家。生家 『宮崎方』
 mu:tu ja: <本家>
 モモゲ 鳥類の胃袋、ももき 『大隅方』
 ʔuʃuge: <胃>の ge: は関係あるか
 momotabba 腿 福江方言(『五島列島』)
 momotaiba “ 上五島方言 “
 tʃibitanra <尻>の tanra は関係あるか
 もる ① 小果実の類を摘む。② 花又は実を
 摘む 『宮崎方』
 muig <果物を摘む> kunibu muig <み
 かんをとる>「七尺石垣の花もゆる間や
 こまいまるるまきりゆるちたばうれ」の
 「もゆる」は花を<摘む>ということ。
 やいつ 灸 『宮崎方』
 ja:tʃu: <やいと>(→「エツ」)
 やおつり 移転 『博多方』
 “ 転宅 『宮崎方』
 やうつり 引越し、転居 『宮崎方』
 やうつい 引越し、転宅 『都城方』
 ヤウッイ 転宅 『鹿辞』
 ja:ʔu:tʃi: <引越し。家移りのこと>

ヤシヲ 椰子 『対馬方』
 椰子のことを宮古の多良間方言で **jaʃu** という。那覇は **ja:ʃi**
 ヤセ 野菜 ゴンザ『漂流民』
ja:ʃe: <野菜>
 コッノヤネ 蜘蛛の巣 『鹿辞』
 首里方言の「**janijun** ⊖骨組みを作る」
 (『沖辞』)など関係あるか
 やま はやし(林) 『宮崎方』
 ヤマ 林 ゴンザ『漂流民』
 ヤマ 森, 林という語の代りに一般に用いられる。林という語は存在せぬ 『大隅方』
jama <山でも平地でも樹木の生えているところ。草の生えているところにも言うことがある。ハヤシと言う言葉はない>
 ヤンメエ 疫病 対島北(「方言」2—3)
 ヤンメ 病み目 『熊南方』
 やんめ 病気 『宮崎方』
 “ “ 『都城方』
 ヤンメ 病 『鹿辞』
jammë: 病気 宝島(『薩南諸島』)
jamme: <病気>
 やんもち とりもち 『宮崎方』
 やんもつ 鳥もち 『都城方』
 ヤンモチ とりもち 『鹿辞』
 “ “ 『大隅方』
 ヤマモチ, ヤンモチ とりもち 種子島
 (「方言」3—3)
 ヤンモチ 鳥もち 宝島(「方言」2—1)
jammutʃi <とりもち **gadʒimaru** や松の樹液などで作る>
 イイ……大田植など殊にイイですことが多い
 熊本県山村語彙(「方言」6—12)
 イモドシ 受けた労力を返すこと
 『熊南方』
 ゆ, ゆい 労働力の交換, 結い 『都城方』
 ゆもどし 結い戻し 『都城方』
 ユ 仕事交換 『鹿辞』
 ユエ, イユ 労働交換 大隅方言佐多(「方言」4—5)

ユー 労働交換 大隅方言田代(「方言」4—5)
 イイ 結 大隅百引(「方言」5—4)
 イ 労力を労力で交換すること 『大隅方』
 イー ゆひ, 労力交換 種子島(「方言」3—3)
 i: 結 中種子(『薩南諸島』)
 “ “ 宮之浦 “
 “ “ 尾之間 “
 jui “ 黒島 “
 (i: “ 鹿児島 “
 jui
i:ma:ru: <交代交代, つぎつぎ, 順順>
 『今帰仁方言辞典』にはユイ <労働交換>
 ユイマールー <労力交換を順に行うこと>
 がのっている
 ゆう ヨク, 「ゆうキタ」 『佐賀方』
 ゆ, ゆう よく。しばしば 『宮崎方』
 ゆう, ゆうと よく, よーく 『都城方』
 ゆ よく。ゆ おじゃした(よくおいでになりました) 『かごしま語あんない』
ju: <よく>, **ju: tʃe:sa** <よく来たね>。
ju: 湯 宮之浦(『薩南諸島』)
ju: <湯>
ju:bi 指 宮之浦(『薩南諸島』)
ʔi:bi <指>
 ユーリー 幽霊 『大分方』
ju:ri: <幽霊, おばけ>
 ゆえ 祝い 『都城方』
 ユエ 祝 『鹿辞』
 ユヘ(ユーヘ) 祝 屋久島方言(「方言」4—4)
 ユヘ 祝 硫黄島方言(「方言」4—9)
ʔu:e: <お祝い>。『沖辞』には「**ʔiwe:**,
 'juuwee, ʔuiwee, ʔujuwee」という形がみえる。
 ユビガネ 指輪 『対馬方』
 ゆびがね “ 「長崎歳時記」「年中行事」(『九州方言』)
 ユビガネ 指環 『大隅方』

ʔi:binagi: <指輪> の nagi: はガネの音
韻転倒した形に由来している。『沖辞』に
は ʔiibiganii とある。

ゆだれ ヨダレ (涎) 『佐賀方』
" よだれ。涎 『宮崎方』
エダリ " " "
ユダイ " " "
" " " 『大隅方』
" 涎 『鹿辞』

jurai <よだれ>, 『沖辞』は judai
ユルス 放す, 握った手など 『大隅方』
jurusu <はなす> ti: jurusu <手をは
なす>

よ 節 『鹿辞』
ヨウ 節間 タケノ ヨウン ナンカ (竹の
節間が長い) 『熊南方』
よぎり 竹の節間を利用した水筒 『宮崎
方』

『おもろさうし^{辞典}総索引』に「-世ゝきよら
(-よよ清ら) 竹の節(よ)の間が長
く, 伸びやかなように背丈のすらりとした
形容」とある。「坂本のいべやだんちよ
豊まれる よよぎよらが一本こぼの三本」
という琉歌の「よよぎよら」は<黒つぐ>
のことと言われるが, 元の意味は<節が美
しい>ということ。『今帰仁方言 辞典』に
「ユユ ① 竹の節と節との間」とある。

ヨロヅキ 閏月のこと 対馬民俗語彙稿
(「方言」7—7)

ヨリヅキ 閏月 『対馬方』
よりづき 閏の月 『宮崎方』
ヨイツキ 閏月 『大隅方』
ヨイチツ (隅) 閏月 『鹿辞』
ヨイッ (薩) " "

jundʒitʃi <閏月>

よいと云事を, 筑紫にて。よかと云 『物類
称呼』

よか よろしい 『博多方』
ヨカ " 『肥後方』
よか よい 『宮崎方』

よか よい 『都城方』
ヨカ 良く ゴンザ『漂流民』
" 良い 『大隅方』
" ヨイ 『鹿辞』

『九州方言の基礎的研究』P161の図によれば,
ヨカ・ヨガの分布するのは肥筑方言と薩隅方言
の地域であるから, 大体西九州に優勢に分布す
るといえる。

士族を jukattʃu というが, これは「良カ
人」に当たる。

よき 斧 『博多方』
" 斧。薪割 『宮崎方』
" " 『都城方』

よっ " "
ヨッ " 『鹿辞』
コヨキ 小斧 種子島(「方言」3—3)
jo:ki 斧 宮之浦(『薩南諸島』)

ju:tʃi <よき。u:ŋ (おの) の小さいもの>

よこふ (-こう) 憩う, 休む 「倭訓栞」
九州(『九州方言』)

よこう 休む 『博多方』
よこい 休 " "
よくう イコフ 『佐賀方』

ヨコイ, ヨコウ, ヨコウタ 休む, 寝る。下
の語 長崎版日葡(「方言」3—5)

よこふ 憩 『菊池俗言考』

ヨクー (八, 球, 芦, 天), ヨコー (飽, 宇,
上, 球, 芦, 天), ヨコウ (全<筆者注, 熊
本県全部>) 以上『熊方資』の<休む>
の項より。

ヨコイ 村の休み日 球磨山村語彙(「方
言」5—8)

ヨコイアガリ 村共同の休みの終わった仕事初
めの日 熊本県山村語彙(「方言」6—12)

ヨクー 休息スル 『大分方』

ヨクイー 休息 『大分方』

ヨコイ " "

ヨコフ 憩フ "

よくふ 休息する 「日向纂記」(『九州方
言』)

よく 休み 『宮崎方』
 よくい 休み “
 よくう 休む “
 よこい 休み “
 よこう 休む “
 よく, よくう 休む 『都城方』
 ヨク 憩フ 『鹿辞』
 ヨクヨク 休み休み 『大隅方』
 joko: 休む 中種子(『薩南諸島』)
 “ “ 宮之浦 “
 “ “ 宝島 “
 jokau “ 黒島 “
 ヨコウ やすむ 宝島(「方言」2—1)
 jukuin <休む>, jukuto:ŋ <休んでいる>,
 jukui jukui fe: <休み休みせよ>
 よさり 夜間 『博多方』
 よさり 夜分 「はまおぎ」久留米,「伊勢道中不案内記」佐賀(『九州方言』)
 よさい 夜分 『佐賀方』
 ヨサリ, ヨサル, ヨサイ, ヨサッ 夜
 『五島方』
 josaT 晩 福江(『五島列島』)
 josai “ 上五島 “
 よさり方 夜去方 『菊池俗言考』
 ヨサリ 夜 『熊南方』
 ユウサリ 夜 『肥後方』
 ヨサイ 夜 天草牛深(「方言」3—8)
 ユーサ 日暮 『大分方』
 ゆうさ 晩 『宮崎方』
 ゆうさがた 夕方 『宮崎方』
 ゆうさり 晩になるころ 『宮崎方』
 ゆうさがた 夕方 『宮崎方』
 ゆさり 夕方。夜 “
 ゆさがた 夕方 “
 ゆさい, ゆさいもと, よさい 夕方
 『都城方』
 ヨサ ヨル 『鹿辞』
 jusanri <夕方>, jusanrigata <夕方>
 ただし jusanri はユサラビに溯るかもしれない。

ヨナ 阿蘇山から噴き出したヨナや灰石が…
 『肥後の方言』
 よな 火山灰 『宮崎方』
 与根, 与那原などは砂に関係ある地名といわれる。『沖辞』には砂の雅語として 'juni が出ている。
 ヨミ 機織の際の縦糸の数の単位で, 四十筋を一ヨミという 『大隅方』
 琉歌「七よみとはたいんかせかけておきゆて 里があかいづ羽御衣よすらね」の「よみ」は機の経糸の密度を示す語。『沖辞』にも 'jumi がみえる。
 よむ 数を数える 『宮崎方』
 jumun <数える>, jurima: <数えてみなさい>
 よも, よもざい 猿 『都城方』
 ヨモ 猿 大隅帖佐(「方言」4—5)
 ヨモ 猿。山で猿をみたらヨモと云へといふ。サルを忌む山語 大隅百引(「方言」5—4)
 ヨモザル, ヨモ 猿の別名 『大隅方』
 ヨモ 猿 『鹿辞』
 卑称の接頭語に jumu があり jumu inagu <ヨモ女>, jumudzira <ヨモ顔> などと用いられるが関係あるか。琉球で猿にヨモなどと言うところは無いようである。
 らんがさ, だんがさ 蘭傘, こうもり傘
 『都城方』
 らんがさ 洋傘 『かごしま語あんない』
 ランガサ “ 宝島(「方言」2—1)
 rangasa <こうもり傘> (→「だんがさ」)
 れ 命令を表す語。よ。見れ, 起きれ, 出れ, 着れ 『都城方』
 n:re: <見よ>, ?ukire: <起きよ> など
 のようにラ行の動詞の命令形に -re: が現れることが多い。ただし語源的には「れ」に「わ」の付いた形と思われる。
 れんぎ すりこぎ 『宮崎方』
 ri:dzi <すりこぎ>
 わかぎ 山から檜などの木を切って来て正月

の庭に立てて祝うもの 『宮崎方』

元日の早朝 wakamidʒi ʔusagijabira,
wakagi wakawakatu <若水さしあげまし
ょう, 若木若か若かと> といって少年達が
若水を売り歩いたという(『沖縄の言葉』
等参)

わく 挽きに割る 『宮崎方』

watʃuŋ <挽く>。木を挽くことを職業とす
るところから ki:watʃi <木引き> という
屋号がある。

ひきがえる 西国にて。わくどう…わくひき
『物類称呼』

わくどう (一を) ひき蛙 「倭訓栞」
『九州方言』

わくど ひきがえる 『筑紫方言』

わくどう ガマ 『佐賀方』

ワクヒキ, ワクド 大なる蟻 「長崎版日
葡」(「方言」2—2)

ワック 蛙 天草牛深(「方言」3—8)

わくど 蛙 肥後方言集(「方言」4—6)

ワクドー ひきがえる 球磨山村語彙(「方
言」5—8)

ワクド 蛙 『大分方』

ワクド 蟻 ”

ワクドー 蛙 ”

わくど かえる, ひきがえる 『宮崎方』

わくどびき がま, ひきがえる ”

わくひき ひきがえる ”

わくど, わっどびっ ひき蛙 『都城方』

わくど がまがえる 『鹿辞』

『沖辞』に「wakubici ひきがえる。が
まがえる」とある。『今帰仁方言辞典』に
も「ワクービち」とある。

ワタ 腸(児語, 女語) 宝島(「方言」2
—1)

センピロワタ 鳥類のはらわた。千尋腸
『大隅方』

ズズイワタ 鳥類の臓腑 『大隅方』

ʔi:wata <腸>, watami:muŋ <内臓>

『九州方言の基礎的研究』のP124の「へそく

り」の一覧表によれば大分県南海部郡鶴見町大
字地松浦と宮崎県西諸市南方の2箇所にワタク
シという形がみえる。

わたくし へそくり 『宮崎方』

watakufi <へそくり>

ワップスル 分ける 『熊南方』

wappu:suŋ <分ける>

わやく いたづら 『博多方』

わやくもん 怠け者 ”

わやくらしい 和約等シキナリ取締ナキ意
『菊池俗信考』

わやく 乱暴 「古今風俗太平記」「七福
神評定録」以上佐賀(『九州方言』)

わやく イタヅラ。(悪戯)(悪口)「わやく」
シテハイケナイ。ソナ「わやく」ハ云フナ
『佐賀方』

わやくいふ ワルクチスル 『佐賀方』

ワヤク 妨害する 『五島方』

ワヤクスイ ふざける 天草牛深(「方言」
3—8)

ワヤク 冗談 『肥後方』

ワヤク 悪戯 『大分方』

わやく たわむれ, じょうだん, いたづら
『宮崎方』

わやく 冗談, ふざけること 『都城方』

ワヤク いたづら 『大隅方』

ワヤク 冗談 『鹿辞』

ワヤキ 冗談ニ ”

ワヤクスル 戯れる 種子(「方言」3—7)

watʃaku <いたづら, からかうこと>,
watʃakuŋ <いたづらする>, watʃakusuŋ
<いたづらする>, re:dʒe: watʃaku <殊
更に妨害のようなことをすること>。『東江
随筆』に悪戯の意で「弄悩」という字があ
りワンヤク, ワニヤクと読みがながふられ
ている。

わらすぼ 藁の芯 「はまおぎ」筑後(『九
州方言』)

ワラスボ 藁のすぼ 『五島方』

ワラスボ 藁しべ 『肥後方』

わらしべ、わらしん 藁先の芯、稲先の実の
着いていたところ 『都城方』

わらすぼ 藁くず ”

わらしぶ わらの外側につくはかまの部分
『宮崎方』

わらすぼ 藁くず 『都城方』

わらすんぼ ” ”

ワラスボ ワラシベ 『鹿辞』

スボ 藁のしべ 『大隅方』

warajimbu: <わらしべ>

わらべ、わらび 童児 『都城方』

ワラベ 童 『鹿辞』

ワラベロシ 子供らしい 『大隅方』

warabi <子供> warabira:sə <子供らしい>

mma 祖母 宝島(『薩南諸島』)

?amma: <母>など関係あるか。

ンモスイ (幼児語) 大便をする 『鹿辞』

んもんもする 腹這いになって歩く 『都城方』

m:mo: <よつんばいになっているさま>。

m:mo:fe: <ンモシーしなさい、幼児が大
便をして親に尻をふいてもらうときに言う>

以下は接頭語、接尾語、反復法(疊語)など
を取りあげる。

イッカヤス 覆す。かやす 『対馬方』

いっこぼす コボス 『佐賀方』

イスツル(球), イッカヤス(球), イックリカ
ヤス(天), イッコバス(玉, 宇, 下, 八,
球, 芦, 天) 以上『熊方資』の<こぼす>
の項より。

イッカヤス 覆ス 『大分方』

イックリカヤス 覆ス 『大分方』

イックリカヤス こぼしてしまうこと

『日向の方言』

いっかえる ひっくりかえる 『宮崎方』

いっかやす ” ”

いっかやす, いっくいやす 液体などをこ
ぼす 『都城方』

イッカヤス 容器の中からこぼしてしまう
『大隅方』

イッカヤス 覆ス 『鹿辞』

イツコボス ” ”

イッカエス こぼす 種子島(「方言」3—
3)

?i:ke:rasuŋ <引っくり返す。水などの入
った容器を引っくり返す>の接頭部分の
?i: と同じもの。単に ke:rasuŋ というと
<倒す>の意が強い。

ううさわざ 大騒ぎ 「はまおぎ」(『九州
方言』)

ううきんちやく 大きな巾着 「伊勢道中
不案内記」佐賀(『九州方言』)

ううそろばん 大きな算盤 「傳傳稽酒 一寸見
た夢物語」佐賀(『九州方言』)

うごつ 大変なこと, 大ごと 『宮崎方』

?u:gutu <大ごと(良い場合も悪い場合
も)>, ?uφu ?iju <大魚>, ?uφu na:bi
<大鍋>, ?uφu ja: <大家>

ウットマル 話や読書の央ばに語の止まる
『対馬方』

うっくずす 崩す。うちくずす 『宮崎方』

うっこやす こわす。うちこわす 『宮崎
方』

うっとける 倒れる 『都城方』

うっぱぐ はぎとる ”

ウチュル 売払う 『大隅方』

ウチリ 入れてしまえ ”

ウッカブル 引き被ぐ ”

ウチクヤス 破壊する ゴンザ『漂流民』

ウツクヤス 破ス 『鹿辞』

ウッスッ 捨ル ”

ウッタクツ ナグル ”

オットイ 盗ム ”

?uttumaig <ウチ止まる>, ?utturasuŋ
<ウチとらす>, ?utjiku:suŋ <ウチ壊わ
す>, ?utji?uiŋ <ウチ売る>, ?utjikan-
dzuŋ <ウチかぶる>, ?utjikurusuŋ <ウ
チこらす>などの接頭語 ?ut, ?utji は強

調または語調を整える程度のはたらきであるが、那覇方言でも盛んに使われる。

カイ 動詞に添はりて強勢をあらはす小辞。

カイコロブ、カイクム、カイダク、カイヒラ
ク 長崎版日葡(「方言」2—5)

かいまぐるゝ 気絶スル 『佐賀方』

ケー (接頭) カキ、カイ、ノ音便 ケー死子

ケー黙レ等云フガ如シ 『大分方』

けさがる さがってしまう 『都城方』

けなえる 萎える 『都城方』

けおてた 落ちた 『宮崎方』

けくさる くたる ”

けしぬ 死ぬ ”

ケ 動詞の上に強勢的に付加する。「ケ知れた」「ケ死んだ」「ケだれた」「病気になった」

『大隅方』

ケオツイ 落ちる 『鹿辞』

ケクユイ 壊レル 『鹿辞』

ケコロダ ケツマヅイタ 『鹿辞』

ケシンダ シンデシマッタ ”

ケクエタ 崩れた 硫黄島(「方言」4—9)

軽い強調の意の接頭語 *ke:* は那覇方言では盛んではないが、中部たとえば具志川の方言などでは盛んで *ke:ʔutitaŋ* <ケー落ちた>, *ke:kusarito:ŋ* <ケー腐れている>, *ke:ʃidʒo:ŋ* <ケー死んでいる> などとよく用いられる。

サラバカ 白痴 『肥後方』

saraʔurimuŋ <ほんとうの馬鹿>, *sarama*

kutu <ほんとうの真面目>

チチクラアス 打ち喰わす 『対馬方』

ちい(接頭語) ちい失うた 『佐賀方』

つん(”)「つん殺ス」「つんクシル」

『佐賀方』

ツクシル つゝきまはす 『肥後方』

ツンオル 折る ”

チチクラヘ 打食へ 『大分方』

チチコロス 殺スコト ”

ちったたく たたく、なぐる 『宮崎方』

つん(強勢の接頭語)「ツン崩やす」「ツン折る」

「ツン割る」 『宮崎方』

ちあえる、ちおてた(落ちてしまう、くちは強意の接頭語) 『都城方』

ツ又はツン。ツオテタ<落ちてしまった>, ツックエタ<こわれて了った>, ツンワレタ<割れて了った> 『大隅方』

ツクシル 穴つつく 『大隅方』

ツッポガス 穴ヲアケル 『鹿辞』

ツンオッ 折ル 『鹿辞』

チヒル 拾フテシマフ 『鹿辞』

tʃi:ke:ri:nro: <引っくり返るぞ>, *tʃi:ʕi-*

tire: <捨ててしまえ>, *tʃi:jaɾaʃe:* <チー

動かせ>, *tʃimmuri:ŋ* <(果物などを)も

る>。強意の接頭語 *tʃi:*, *tʃim* は明治も前半の人達が使う傾きがある。『今帰仁方言辞典』には「ちっかールン 急にひっかかる」「ちっぷギルン 突き通されて穴があく」のように、接頭語ちっがみえる。

ヒンマイダ 急ぎて或は力をこめて脱ぐ

「長崎版日葡」(「方言」2—2)

ひん(強意の接頭語) ひん曲げる 『都城方』

ひん〔接頭〕動詞にかぶせて語勢を強める。

「ヒンだるる」「ヒン出た」 『宮崎方』

ヒッタマガイ 魂消ル 『鹿辞』

ヒンダレタ ソカレタ ”

ヒットダ 飛んだ 硫黄島(「方言」4—9)

ヒンヌグ 脱いだ ” ”

ʕi:tubuŋ <ふっ飛ぶ>, *ʕi:turi ne:ŋ* <ふ

っ飛んで無い> のように *tubuŋ* に接頭して使われる。

マックラスミ 真の闇 『肥後方』

makkuraʃiŋ <真暗闇> (→「くらすみ」)

いみじんごろ 恥ずかしがりや 『宮崎方』

いやしごろ くいしんぼう ”

ぬすとごろ 盗人 『宮崎方』

ばかすつごろ ばか者 ”

ひんじゃごろ 貧乏人 『宮崎方』

ふゆしごろ 不養生な者 『都城方』

みとなしごろ 見たくない奴 ”

めすといごろ おべっか者 ”

よっごろ 慾深者 “
 いやしごろ 食いしんぼう 『日向の方
 言』)
 イヤシゴロ クヒシンボ 『鹿辞』
 イネブイゴロ キネムリモノ “
 アマエゴロ アマエッコ “
 ケンクッゴロ 喧嘩買 “
 ダンゴロ 牛車曳 “
 ニギイゴロ 吝嗇者 大隅方言 佐多(「方
 言」4—5)
 イヤシゴロ 食しんぼ 大隅方言 帖佐(「方
 言」4—5)
 シイゴロ 末子 大隅百引(「方言」5—4)
 ヨッゴロ 吝嗇家 硫黄島(「方言」4—9)
 『方言学講座』第四卷P97に大隅西南尖端部
 にポーシンコ(帽子), フネンコ(舟), ミチン
 コ(道)のように接尾語コの例がみえる
 那覇方言の接尾語 **gwa:** は?iŋgwa: <犬>,
ja:gwa: <家>, **na:bigwa:** <鍋>, **hana-**
gwa: <花>, **midzigwa:** <水>, **ttʃugwa:**
 <人> のようになんにでも接尾して非常に
 よく用いられる。意味は小さいもの、愛す
 べきもののような意から、付いても付かな
 くても大体同じ意のものまである。
gwa: の語源は、ごく僅かに **gama** と
 いう形が残っていること。『今帰仁方言辞
 典』の **gama**, 与論・沖永良部にほのかに
 みえる **gama**, 宮古に優勢な **gama**, オモ
 ロの「かま」から考えて、**gama** というこ
 も考えられる。また、**kkwa** <子>が**kora**
 あるいは**kura**に溯るということから、南
 九州のゴロとの関連も考えられそうであ
 る。
 『図説琉球語辞典』P94に15世紀前後に
 「※**ko**(子)が接尾敬称辞として盛んに使われ
 ていた」とあるが、上記大隅西南尖端部の
 コ、遠く東北との関係なども考えられる。
 『奄美方言の研究』に「アサネゴロ 朝寝
 坊」とあるが九州語の移入語であろう。
 うツつかツツ 伯仲の間にあるをいふ 上

五島(「方言」7—9)
 うつつかつ 優劣のないこと。勢力が匹敵
 するさま 『宮崎方』
 ?uttʃikattʃi <大体似ていること。ほぼつ
 りあっていること>
 ゆるりくわっさり ゆっくり。ゆるゆる
 『宮崎方』
 ヨロイクワッタイ ヨロヨロ 『鹿辞』
 ヨロイクワライ よろよると 『大隅方』
ju:ru:kwa:ru: <きっちりしないときに用
 いる。ゆるゆる>。『沖辞』には'jooraa-
kwaraa または'jooruukwaruu とある。
 イッピヤコッピヤ 到るところ 天草牛深
 (「方言」3—8)
 イッペコッペ どこにもかしこにも
 『熊南方』
 イッペーコッペ 全面に 『大分方』
 いっぺこっぺ どこもかしこも。いっぱい。
 たくさん。「イッペコッペさがしたが見つか
 らん」 『宮崎方』
 いっぺこっぺ 所々方々 『都城方』
 イッペコツペ どこもかしこも 『日向の
 方言』
 イッペコッペ 所々方々所構わず 『大隅
 方』
 イッペコツペ 所々方々 『鹿辞』
 首里で「?iQpeekuQpee 方方。あっちで
 もこっちでも」(『沖辞』)。那覇の ?ippe:-
suppe: は一生懸命の意。
 ドウデンコウデン どうでもこうでも
 『肥後方』
 ドシテンコシテン 是非トモ 『鹿辞』
 ナンデンカンデン ナンデモカデモ
 『鹿辞』
 なんでんかんでん 何でも彼でも 『都城
 方』
tʃa:ʃiŋ ka:ʃiŋ <どうにでも>, **tʃa:ŋ ka:ŋ**
 <どうにも> などの反復法に似た語のつく
 りかたである。
 とったかみたか のるかそるか 『宮崎方』

tuttaka mittaka so:ŋ <大切にしている、大事に大事に> に関係あるか。

チンナリタンナリ 少しづゝ 『熊南方』
ちんなんたんなん 少しずつ 『宮崎方』

tʃirina: tarana: <十分に無いこと。けちけちしていること>。ʔuriga hakaiʃe:

tutʃi tʃirina: tarana: <こいつの計り方はいつもチリナータラナー>

ねつねつ ゆっくり長く話すさま 『都城方』

nittʃiri ke:tʃiri <話、物事などをゆっくりするとき用いる>

べたくわた べたべたする形 『都城方』

butta kwatta <べたべたするさま>。

ʃutʃagi ʔakamami butta kwatta <おはぎと赤豆べたべた(とくっついているさま)>

ヨガミヒシリ 歪曲したさま 『対馬方』

よごひご くねくね 『宮崎方』

よんごひんご 曲りくねっていること

『宮崎方』

よんごひんご 曲りくねったさま 『都城方』

ヨongoヒンゴ 曲折 『鹿辞』

ヨongoヒンゴ まがりくねり 大隅方言

(帖佐)(「方言」4—5)

jo:ga:ʃi:ga: <くねくねと曲がっているさま>

以上で「琉球方言と九州諸方言との比較」をひとまず閉じることにする。九州諸方言の方言集をみることから出発し始めたが、さて以上の比較した語彙を分類することが出来るかという、はつきりこうだとはいえない。しかし、なにがしかのことは述べておきたい。

①古い時代から共通にあった言葉

ʔaka <船底に溜まる水>, ʔakatʃitʃi <早朝>

ʔadzɪ <口蓋>, ʔa:ke:dʒu: <蜻蛉>, ʔadʒa <ほくろ>, ʔafidʒa <下駄>, ʔattani <急に>, ʔatara

sag <もったいない>, ʔaru <かかと>, ne: <地震>, 目的の助詞 ba <を>, ʃuki <湯気>……

など取り出してみると、これらは文献に登場する古語と共通するものである。九州と琉球の古さを物語るものなのであろう。

②より古い語か

ʔiritʃi <うろこ>, ʔiju <魚> は九州の「いろこ」「いを」に当たる。これらは「うろこ」や「うを」の古い形といわれる。ʔndʒutʃuŋ <動く>, ʔi:bi <指> の九州諸方言「いごく」「いび」は変化した形のように言われるが、より古い形ではないだろうか。同じように, n:dʒi <とげ> の「いげ」, ʃugi:ŋ <穴が開く> の「ほげる」も広く分布するので、より古そうな語である。ʔi:ja: <胎盤> の「いや」もそのように思える。

③九州琉球的な語

ʔiri <錐>, kakadzɪ:ŋ <ひっかく>, gani <蟹>, ʃiba <舌> 九州はスバで <唇>, ʃi:muŋ <もぐる>, darujami <晩酌>……

④薩隅と共通

ʔutʃiʔami <暴風のさい吹きこむ雨>, kara-kara: <きゅうす型の酒器>, kami:ŋ <頭上にのせる>, ke:ʃima: <引っくり返しに着ること>, kubagasa <びろうの葉で作った笠>, 接頭語, 接尾語, 反復法(豊語)……

⑤近世に琉球へ流入した語

gettʃo: <毬杖>, dʒuri <女郎>, tʃo:tʃika tʃo:tʃika <呪文>, tʃinro: <秤の重り>, me:ʃi <おべっか>……

以上のようなことが、限定された資料から、おおまかに言えるかもしれないという程度のことである。

以下に引用した文献のリストをあげる。

『諸国方言 物類称呼』京都大学文学部国語学国文

学研究室編

『筑紫方言』（『国語学大系』10巻所収）
『菊池俗言考』（ “ ” ）
『九州方言の基礎的研究』九州方言学会
『対馬南部方言集』柳田国男編 滝山政太郎著
『対馬民謡集』（『日本民俗誌大系』所収）
『博多方言』原田種夫
『佐賀県方言辞典全』佐賀県教育会編纂
『長崎方言集』本山桂川
『五島方言集』郡家真一
『五島列島の方言』平山輝男・大島一郎
『肥後の方言』秋山正次
『肥後方言集』倉岡幸吉
『熊本県南部方言考』齊藤俊三
『熊本県方言資料篇』田仲正行
『大分県方言類集』土肥健之助編輯
『宮崎県方言辞典』原田章之進編
『都城方言集』瀬戸山計佐儀
『日向の方言』石川恒太郎
『かごしま語あんない』竹村清
『鹿児島方言辞典』嶋戸貞義
『鹿児島方言小辞典』南日本新聞開発センター
『大隅肝属郡方言集』柳田国男編 野村伝四著
『漂流民の言語』村山七郎
『薩南諸島の総合的研究』平山輝男編
『九州方言の基礎的研究』収載の次の34点の文献を参照した
「伊勢道中不案内記」「異船旱魃神評定」「田舎狂言幕の内外」「大隅国風土記逸文」「^{奥九}井中水」「おさらば双紙」「瓦礫雑考」「戯場粹言幕之外」「甲子夜話」「古今風俗太平記」「^{骨積}酒落一寸見た夢物語」「三法論儀集」「七福神評定録」「男色哥書羽織」「筑紫方言」「壺盧圃雜記」「東海道中膝栗毛」「長崎歳時記」「^傳浮世風呂」「日暮芥草」「年中行事」「葉隠」「花暦八笑人」「はまおぎ」「反魂二世物語」「平家女護島」「望春随筆」「町方盛衰記」「町々かざり評番」「森川許六の歌」「柳川方言汨河沙一撮」「大和口上言葉集」「大和口上物語集」「六韜三略猫の巻」「倭訓栞」

「方言」1—2・3

「方言」2—1・2・3・5・10

「方言」3—3・5・6・7・8・11

「方言」4—4・5・6・9・10

「方言」5—4・5・8・9・12

「方言」6—4・10・11・12

「方言」7—3・7・9

「方言」8—1

『奄美方言分類辞典』長田須磨 須山名保子
藤井美佐子

『奄美方言の研究』寺師忠夫

『喜界島方言集』岩倉一郎

『沖永良部島民俗誌』柏常秋

「南島古代の葬制」(『伊波普猷全集』5巻)

『沖縄語辞典』国立国語研究所編

『沖縄語典』仲本政世

『沖縄童謡集』島袋全発

『^仲今帰仁方言辞典』仲宗根政善

『沖縄の言葉』外間守善

『^校本おもろさうし』仲原善忠 外間守善

『おもろさうし^{辞典}』第二版 仲原善忠
外間守善

『原色沖縄の魚』具志堅宗弘

『混効験集校本と研究』外間守善編著

『採訪南島語彙稿』（『宮良当社全集』7巻）

『図説琉球語辞典』中本正智

『東汀随筆』喜舎場朝賢

『仲原善忠選集』下巻

『今帰仁村史』今帰仁村史編纂委員会

『南島方言史攷』伊波普猷

『南島八重垣』山内盛熹稿 伊波普猷補(「方言」4—10収載)

『^校註羽地仕置』東恩納寛惇

『^{標音}琉歌全集』島袋盛敏 翁長俊郎

『風土と言葉』宮良当壮

『方言学講座』第四巻

『八重山語彙』宮良当壮

『八重山古謡』喜舎場永珣

『琉球戯曲辞典』（『伊波普猷全集』8巻所収）

「琉球方言における人称代名詞，内間直仁

(『琉球の方言』法政大学沖縄文化研究所1978年)

『琉球方言音韻の研究』中本正智

『琉球方言の総合的研究』平山輝男

79年の8巻1号所収の拙稿でも断っておいたが、上記文献の引用は適宜に引用したのであって、詳細に引用したものではない。数年にわたって、だんだんとカード取りしたので、取りくみの姿勢も等質とはいえない。これらの資料を再度みなおせば、いくらかの出入があると思われる。これも前に書いたことであるが、奄美から与那国までの生えぬきの古老が同様のことをやれば、もっとバライヤティーに豊んだ資料が得られ、九州と琉球の層状が解明出来るようになるかもしれない。

九州琉球の比較の結果、共通している語彙

に、いわゆる古語というのがある。このことは早くから気付かれていて、断片的には例も出ているのであるが、万葉なら万葉、記紀なら記紀で詳細な比較があるかと言うと、残念ながら無いのでは無いだろうか、折あらばこういう面のこともやってみたい。

東条操編の『全国方言辞典』が文献一覧に載っていないことについて断っておかなければいけない。座右にあるこの書を参照しなかったわけは、序の文献調査によるとあるのをみて、私も同じ難儀をしてみようと思ったこと、昭和26年に出版されて後に出た資料も含めて行こうと思ってのことである。しかし、偏屈な仕方ではあるから、次からは素直に恩恵に沿った方が良くと思う。

(1983年 12月 10日)